

9 訪問看護以外の在宅サービスの利用に消極的な家族が有する特性

○ 山本詩帆，島田洋子，山下玲子
(訪問看護ステーションちかもり)

I. はじめに

当ステーションでは、現在約150名を対象に訪問活動を行なっている。多くの対象者は訪問看護以外にも、ショートステイ・デイケア・デイサービス・ホームヘルプサービス等の在宅サービスを組み合わせて利用している。しかし中には、必要性がない、本人の強い拒否がある、経済的負担が大きい等の理由もなく、また家族が在宅サービスに対する知識もあり、家族自身他のサービスも利用すれば介護負担が軽減するであろうと思いながらも、訪問看護以外の在宅サービスを利用するに至っていないケースがある。そこで、それらのサービス利用に消極的なのはなぜか、そのような家族の思いにはどのような特性があるのかを明らかにすることを目的に研究を行った。

II. 研究方法

1) 研究対象：当訪問看護ステーション利用者の家族（○はキーパーソン）4事例

事例1 83才・女性 ○娘（54才） 娘の夫 孫・男3名

事例2 84才・女性 ○娘（58才）

事例3 92才・女性 ○娘（68才） 娘の夫 孫・男1名

事例4 71才・男性 ○妻（75才） 息子 娘

2) 研究方法

①訪問看護の記録物から、訪問看護以外の在宅サービスに対する家族の思いが汲み取れる記録を抽出する。

②記録物以外で、家族と訪問看護婦の会話の中で表現された、訪問看護以外の在宅サービスに対する家族の思いを、スタッフ内のケースカンファレンスで再考し客観的な情報としたもののみを抽出する。

③以上のデータを、KJ法を用いて分析し、家族の特性を明らかにする。

III. 研究結果

事例1～4の家族から聞かれた訪問看護以外の在宅サービスに対する思いを分析した結果、主に3つのグループにわかれた。

1) 施設では1対1ではないから自分と同じように十分対応してもらえない、施設ではスタッフ一人一人が母を理解してくれるわけではないので心配 等

2) 以前施設で骨折したことに対し預けた自分に責任を感じる、他人に預けるのはかわいそう、預けて私だけ旅行に行くのは悪い気がする 等

3) 姉達に相談しても決めるのは自分だと言われる、今一つ思い切れない、主人や子供達には迷惑をかけたくないので頼れない、相談しやすい身内がない、私が決めて何かあったら私の責任になってしまう 等

以上の3つの特性を1)かかえこみ2)罪悪感3)決断力不足とネーミングした。

IV. 考察

1) かかえこみ

キーパーソンが娘の場合、世話が行き届いている分、自分と同じように対応してくれなければ他人に任せられないという、かかえこんだ状態になっている。母親自身が自分の意志を伝達することが困難である程、娘は母親との間に適切な距離が保てず、親子が密着した状態になっている。子育てに関して母親が主導的な役割をすることが多い日本では、母親の存在は大きく、受けた愛情を介護することで返したいという気持ちが生まれるのではないかと。特に母娘では同性ということで相手を同化しやすいのではないかと。それぞれの生育歴や家庭環境が母親に対する思いをより強いものにしていていると思われる。

2) 罪悪感

身内である自分が介護を休むことに罪悪感をもっている。在宅サービスに関する情報があふれている現在でもなお「介護は家族がするのが当然」という風潮が根強く残っており、他人に介護を任せることに対する抵抗感があるであろう。

3) 決断力不足

利用者が自分の意志の伝達が困難な場合、家族が代弁しなければならない。相談する人がいなかったり、決定権が自分に任されている場合、最終的にはキーパーソンが決断しなければならない。専門知識がないために、自分の決定が正しいのかという不安と責任の重さを感じ、決断できずにいるのではないかと。

V. おわりに

訪問看護以外の在宅サービスを利用しない理由は1つではなく、家族のいろいろな思いが組み合わさっていることがわかった。それらの家族に対して、訪問看護婦としてできることを家族の持つそれぞれの特性について考えた。

1) かかえこみ

家族関係・生育歴・家庭環境など様々な因子が複雑にからみあっているため、介護者の考え方をすぐにかえることは困難である。以下2) 3)で述べるような対応をしながら、家族の体力的精神的限界がくる前に、他のサービスを利用する等の対策をとる必要がある。

2) 罪悪感

外出する機会がなく、キーパーソンも閉じこもっているケースでは他の家族と交流する場がない。家族の視野を拡げ、様々な考え方ができるよう、また少しでも家族の罪悪感が軽減するような情報提供や声がけをしていく必要がある。

3) 決断力不足

訪問看護婦の受け入れがよいのは、サービスを受けている間、家族が自分もその場にいることができるという理由の他、看護婦が医学的知識に基づく判断や技術を提供しているからであろう。知識や技術をアドバイスしたり、他の家族と交流する機会をつくることで介護に自信が付き、いろいろなことを決断する際にも参考になるのではないかと。また、家族に影響力のある他職種の協力も得ながら家族の決断をサポートする必要がある。